

## 生ゴミ回収モニター事業

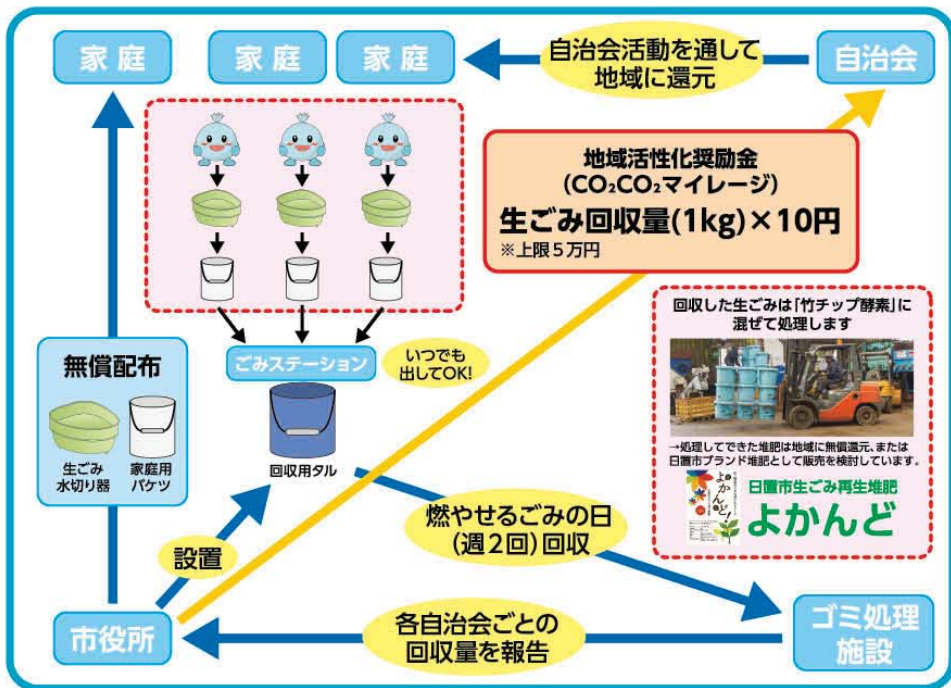
# こっこっ CO<sub>2</sub>CO<sub>2</sub>マイレージ

日置市で平成26年7月からスタートした地域活性化奨励金制度、通称「CO<sub>2</sub>CO<sub>2</sub>(こっこっ)マイレージ」。生ごみをリサイクルすることでごみの焼却量を減らし、地域雇用も生み、さらには二酸化炭素を減らす、地球にも優しい取り組みです。

この活動は平成24年11月からモニタリングを始め、生ごみ回収モニター事業により回収した生ごみの量1キロに対して10円を「地域活性化奨励金」として自治会に支払っています。

生ごみのリサイクルを通じた地域活性化ということで、全国でも珍しい取り組みとして注目されています。

まずはのために使おう！



## —特集— ごみと共に生きる

# 365日、置く。

人口が減っても、ごみの量は増えるというデータがあります。人が減ると、ごみの量も減ると考えるのが普通です。しかし、実際には人口が減れば、その分だけコンビニやスーパー、飲食店などの食品ロスなどが増えてしまい、逆にごみの量は増えてしまっているのです。

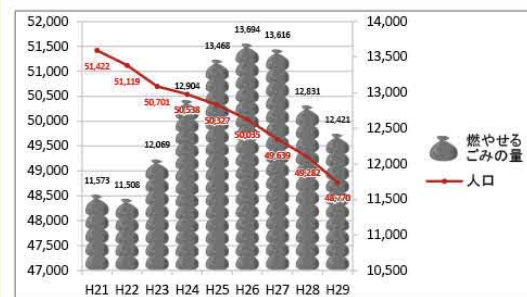
人口が減っているのに、ごみの量が増えるということは、市民一人当たりの負担が増えるということになります。ごみの量を減らしていくことができれば、市の財政を圧迫し、私たちの生活に影響が出てしまいます。



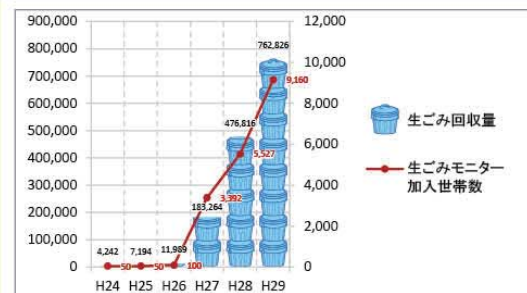
この状況を改善するために、日置市で始めた取り組みが「生ごみ回収モニター事業」です。

ただ捨てるだけであった、食品くずの生ごみを燃やせるごみと分けて収集し、堆肥化するというこの取り組み。ごみステーションに生ごみ回収用の青いタルを24時間365日置くことで、家の中に生ごみを置いておく必要がなくなり、ただのごみも資源化されます。

右のグラフを見ても分かる通り、取り組み後の平成26年以降、燃やせるごみの量



日置市の人口と燃やせるごみの量の推移



日置市の生ごみモニター加入世帯数と生ごみ回収量の推移

### 食品ロスとは

売れ残りや食べ残り、期限切れ商品など、本来は食べられるはずの商品が廃棄されること。食料ロス、フードロスともいう。

# 市民・事業者・市役所 に聞きました



**事業者** 株式会社丸山喜之助商店  
代表取締役 丸山 明紀 さん

●**生ごみの量**  
事業を始めて5年目になります。参加自治会が増えているため、生ごみの量は増えています。  
●**市民の反響**  
やはり24時間いつでも生ごみを捨てられるので、喜ばれます。また自治会単位で堆肥化施設の見学に来られますが、皆さん驚かれます。施設内は思っているよりも臭いはいしませんし、すごく複雑で大きな機械が置いてあるわけでもありません。大切なのはノウハウです。見学後は、皆さん堆肥を取りに来られます。県内外からもいろいろ関係

●**事業で大切なこと**  
生ごみを堆肥化する上で守ってほしいことが2つあります。「異物が混入しないこと」と「水切りの徹底」です。異物の混入については、最初の頃に比べると、かなり少なくなりました。おそろしくみの分別に関して市民の意識が高くなっているのだと思います。  
問題は水切りです。各家庭で行っているとは思いますが、まだ水分が多いです。水分が多いと、生ごみの発酵の速度が遅くなり、作業がうまくいきません。また夏場は特に大変です。これは仕方ないことですが、夏野菜は水分が多いからです。量が多いときは1人で回収用タルを持ちあげることができません。より効率的に、迅速に作業ができるよう、皆さんのご理解とご協力をよろしく願います。



**市民** 城之町上自治会  
会長 永山 博孝 さん

●**最初の印象**  
正直始める前はよくわからないし、面倒くさいと思っていました。平成28年の4月から始め、今年で3年目になります。自治会の役員に口頭で説明しましたが、うまく説明できず納得してもらえませんでした。そこで、自治会の臨時総会の時に市の担当職員に内容の説明してもらいました。すると、皆さんにも納得してもらい、その2カ月後には事業に参加することになりました。何世帯か参加してくれれば良かったらと

●**利用状況**  
毎朝早くに捨てに行く人を見かけます。パケツで持って行ったリ、水切り器のまま持って行ったり。自治会では水分をしっかり切るために、一晩置いて、明るる朝に捨てるよう呼びかけています。初めの頃は臭いの苦情が来ていましたが、竹チップを入れることで改善してもらいました。生ごみ以外の異物が混入しているのもほとんど見ませんが、見つけた時には自治会だよりで注意を呼びかけています。市役所からは自治会ごとでの生ごみ回収量の実績報告があります。その数字からもたくさんの方に協力いただいているのが分かります。

●**現在の印象**  
資源化し、ごみの量を減らしているのはすごいと思います。市外の知人に話をする時、そんなものがあるのかと驚かれます。よそからの観光客などが青いタルを見たら驚かれると思います。想像はつくと思いますが、ひとたび車を走らせれば、青いタルが増えていることに気づきます。それだけ市民に定着してきているのだと思います。  
●**妻・恵子さんの声**  
このようなことができているのは丸山喜之助商店さんのおかげだと思います。生ごみと分別しているのでも、「燃やせるごみの口」にゴミ袋が軽くなったと感じます。夏場は野菜なども傷みやすいので管理に気をつけ、捨てる際にはしっかりと分別をしたいと思えます。

●**導入に至った経緯**  
日置市では平成25年度に全国環境自治体会議ひびき会議の開催地として立候補したものの、特に環境に対して胸を張って取り組んでいるものも無く、平成24年度から生ごみと使用済み食用油のリサイクルに着手しました。  
●**力を入れたところ**  
市民の理解と協力を得るには、納得のいく説明ができるスキルを身につけることが重要です。そのために、まず自分自身がやってみる。実際に料理を作り、水切りから生ごみステーションに持っていきまをコミュニケーションし、時間や手間などのデータを取りました。モニターの方々、簡単に継続して取り組んでいただけるかを考えながら、実践につなげられるよう力を入れました。



**市役所** 日置市役所市民生活課  
環境2係長 久木崎 稔 さん

●**市民の皆さまへ**  
生ごみのリサイクル事業に限らず、日置市のごみの分別などは全国の自治体などから注目され、今や誇れる取り組みになっており、生ごみリサイクル事業によって形成される地域コミュニティの成功事例としても注目されています。これらは市民の理解と協力があって成り

●**今後について**  
ごみは生活に最も直結するものです。個人で法律に従って適正に処理・処分することは難

立っています。市民が主体となって動いていただけることに感謝しています。平成32年度からは市全体で取り組むということと事業を進めています。地球温暖化の原因は焼却などによって排出される二酸化炭素と考えられています。二酸化炭素の削減に地域でCO<sub>2</sub>、CO<sub>2</sub>（ツツ）取り組む事業にご協力をお願いします。

日本には「もったいない」という、すてきな言葉があります。この言葉を表現する言葉は海外にはありません。生ごみをただ捨てるだけでは「もったいない」。宴席で出された料理を食わずに残してしまうのは「もったいない」。そういった「もったいない」の精神を24時間365日、心に置いておくことが大切です。家庭からのごみはしっかりと分別して資源に換える。飲み会では食べる分だけ注文する、または注文した料理は全て食べる。一人ひとりの心がけで、私たちの置かれている状況は変わっていきます。

## 生ごみ(=食べ残し)を減らすための取り組み「3010運動」を紹介します!!



3010運動とは、宴会時の食べ残しを減らすためのキャンペーンで、〈乾杯後30分間〉は席を立たずに料理を楽しみましょう、〈お開き10分前〉になったら、自分の席に戻って、再度料理を楽しみましょう、と呼びかけて、食品ロスを削減するものです。職場や知人との宴会から始めていただき、一人ひとりが「もったいない」を心がけ、楽しくおいしく宴会を楽しみましょう。(環境省HPより)

※食べられずして捨てられる、食品ロスの量は年間約646万トン  
(H30.4.17環境省・農林水産省調べ)

